脳性麻痺の機能的アウトカムを改善するための介入
ベストプラクティスの原則

機能的な目標を持つ脳性麻痺の子どもや若者と関わる際には、機能的なアウトカムを最大化することを目的として、以下のベストプラクティスの原則が推奨される。

1 利用者が選んだ目標を設定するべきである

介入は、子どもにとって何が重要かを理解し、その活動への参加を改善することに重点を置いた機能的な目標を設定することから始めるべきである。目標は機能的で、意味があり、短期間で達成できるものでなければならない。目標は書面にて提示されるべきである。
目標は、介入開始時と終了時に測定される必要がある。

2 目標達成を制限する要因を特定するべきである

臨床家は、子どもが目標を達成しようとする様子を観察し、目標達成を制限する要因を見極める必要がある。これには、子どもがいつ、どこでその活動に参加したいかを話し合ったり、目標達成に役立ちそうな課題や環境について検討したりすることも含まれる。

3 介入には、目標とする行為全体の直接的な練習を含めるべきである

機能障害を焦点とするのではなく、子どもの目標を積極的に実践することが介入の焦点となる。これには、臨床家が「ハンズオフ」のアプローチを行い、子どもが目標をうまく実行できるように支援するためのフィードバックを提供することも含まれる。

4 介入は、子どもにとって楽しく、やる気を起こさせるものでなければならない

介入は、子どもにとって楽しく、やる気を起こさせるものでなければならず、子どもが上達していくのに十分なやりがいのあるものでなければならない。痛みや苦痛を伴う介入は変更し、別の介入を検討すべきである。

5 目標の実践は、家庭やコミュニティで行われるべきである

実生活環境の中で練習を行うことで、目標の達成はより日常生活に反映されやすくなる。それが不可能な場合は、子どもの目標に関連した環境や方策を想定した練習ができるように、介入方法を調整する必要がある。

6 保護者が行う練習は、すべての介入の重要な要素である

臨床家は情報を提供し、家族が子どもの介入に積極的に関与できるようコーチすべきである。各個人に合わせた構造化されたホームプログラムを、継続的なサポートや振り返りと組み合わせることで、セラピーのセッション以外での練習を最大化することができる。

7 子どもと保護者は意思決定をすることができるようになるべきである

臨床家は家族と知識を共有し、家族が十分な情報を得た上で介入について決定できるよう、最新のエビデンスを提供すべきである。臨床家は個々の子どもを考慮し、エビデンスに裏付けられた実践可能で効果的な介入のみを推奨すべきである。

8 目標達成のためには、十分な量の練習を計画すべきである

目標を達成するためにどの程度の練習が必要かを検討し、必要な練習量をどうすれば確保することができるかを家族と協力して計画することが重要である。介入方法によっては、より多くの練習量を必要とする場合があり、介入計画を立てる際にはこの点を考慮することが重要である。

9 チームアプローチを採用すべきである

目標設定と介入計画には、チームアプローチ（子どもと家族もチームの一員である）が推奨される。臨床家／医療提供者が効果的にコミュニケーションをとり、共通の目標に向かって努力することで、家族のプレッシャーを軽減することができる。

翻訳者　堀本佳誉、杉本路斗、登根太一

Jackman, M., Sakzewski, L., Morgan, C., Boyd, R.N., Brennan, S.E., Langdon, K., Toovey, R.A.M., Greaves, S., Thorley, M. and Novak, I. (2021), Interventions to improve physical function for children and young people with cerebral palsy: international clinical practice guideline. Dev Med Child Neurol. https://doi/10.1111/dmcn.15055